

2026年3月21日オンライン開催
東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット
2025年度 日本語プログラム開発事業 報告会
全体会

本ユニットによる 日本語プログラム開発事業について



外国人児童生徒教育推進ユニット
ユニット長 齋藤ひろみ(東京学芸大学)

本資料の利用について

教育・研修を目的とした利用に限ります。資料としてご利用を希望する場合は、コンテンツの出典として「利用する資料等の作成者・執筆者」「利用する資料等が作成・公開された事業名」「コンテンツが示されているウェブサイトのURL」を明記して利用してください。部分的な切り取りや加工をして利用することは禁じます。

1 本ユニットの事業 (全体像)



本ユニットの事業(全体像)

<目的>

子どもたちの文化間移動は活発化し、学校等の教育機関では外国人児童生徒等の教育が重視されるようになりました。学校には、新たな言語・文化との出会いを豊かさに転換し、この子どもたちの学びを保障するために、多様性と包摂性の実現が求められています。わたしたちは、学びの連続性、学び手としてのエイジェンシー、社会的存在としての自己実現、自律的な生涯学習者、社会構造・価値観の見直しをキーワードとし、教育の公正性を議論します。また、実践的課題の解決に向けて、外国人児童生徒等教育・支援に携わる皆さん(教育者)と共に学ぶ場を創ります。そのために以下の事業を行います。(本ユニットウェブサイトより)

<事業>

- 1 調査・研究:外国人児童生徒等の教育・支援を巡る諸問題に関する調査・研究を行います。また、関連情報を収集し提供します。
- 2 開発:**外国人児童生徒等教育・日本語教育の充実に向け、教育内容・方法の検討とプログラム開発、研修プログラムの開発等**を行います。
- 3 研修:外国人児童生徒等教育・日本語指導の担当教師・支援者、学校管理職、指導主事を対象に研修を実施します。
- 4 事業受託:文部科学省等の事業を受託し実施します。
令和3~4年度 文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制整備事業」
令和5年度 文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制の充実に関する調査研究」

年度別事業計画

2022年	2023年	2024年	2025年	2026年
<p>文部科学省委託事業 「高等学校における日本語指導体制整備事業」2021-2022</p>	<p>委託事業「高等学校における日本語指導体制の充実に関する調査研究」2023</p>	<p>『高等学校における外国人生徒等の受入の手引』 『高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』</p>		
<p>領域を横断する課題に関する研究・調査 (「心と身体健康支援」「特別支援と日本語学習支援の複合的ニーズをもつ子どもの教育・支援」)</p>				
	<p>研修用動画作成 web公開</p>		<p>研修用プログラム開発</p>	
		<p>日本語プログラム開発(高等学校 幼・小・中学校)</p>		
<p>幼少中における日本語指導研修</p>		<p>幼少中高の学びの連続性を意識した日本語指導研修</p>		
		<p>高等学校におけるの日本語指導</p>		
		<p>実践交流会</p>		

2 確認

「子どもの日本語教育」の今 (学校における)

文部科学省 (2019) 『外国人児童生徒受入れの手引き』

毎日映画社 (2021) 文部科学省委託「日本語指導が必要な児童生徒等の教育支援基盤整備事業
(動画コンテンツ開発)」

齋藤ひろみ他 (2011) 『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』 凡人社

(1) 日本語教育の役割…成長・発達を支える(全人的教育)

成長・発達過程にある子どもにとって

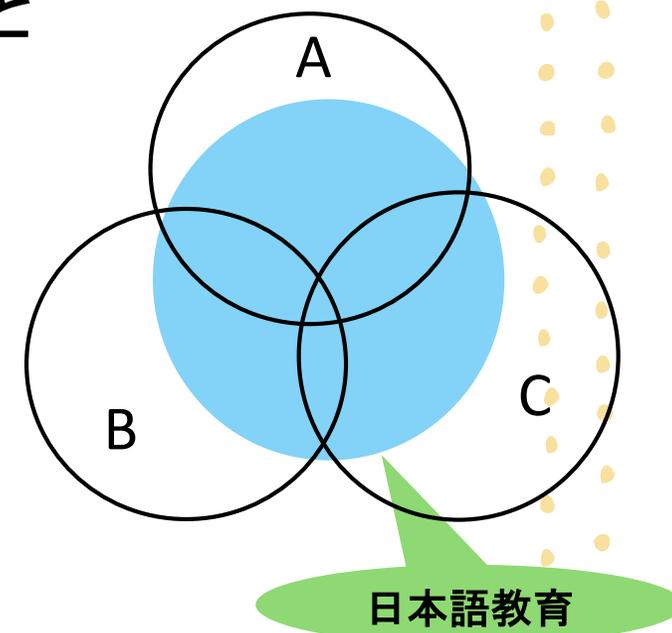
ことばを獲得すること＝世界を広げ成長・発達すること
(≠言語知識や技能の獲得)

<日本語教育の課題>

A 学校・社会生活…文化適応・コミュニケーション

B 学習・認知面の発達…教科等の学習参加

C アイデンティティ形成・自己実現 …キャリア形成・社会参加



(2) 日本語指導の目標と内容(5つのプログラム)

3つの目標(全体的目標)

(1) 学校・社会生活におけるコミュニケーションのための日本語の力を身につける
≡生活言語能力

(2) 教科等の学習に参加するための日本語の力を高める
≡学習言語能力

(3) アイデンティティ形成・自己実現に向けてことばを使う力を育む。

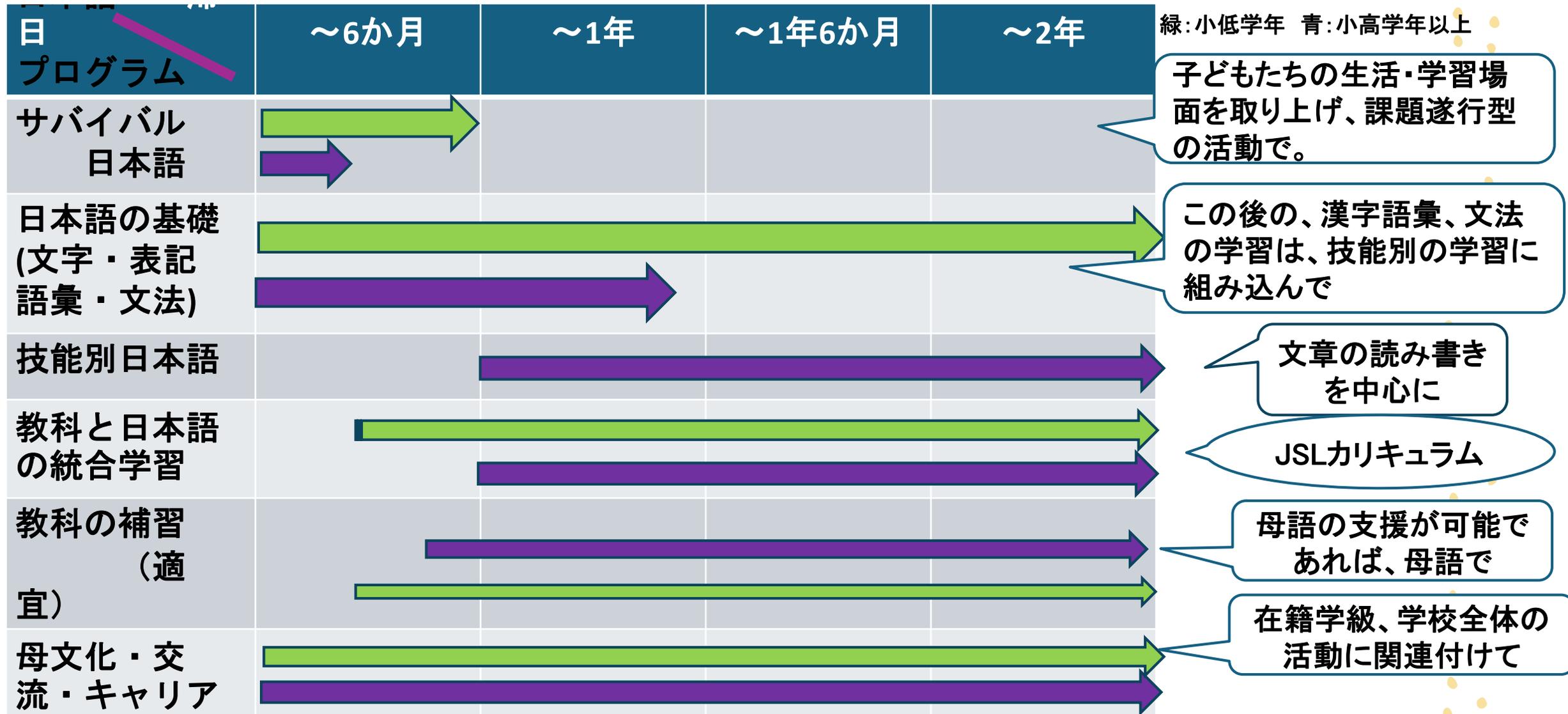
内容をプログラム化

- A 生活場面の語彙・表現、会話
- B 日本語の発音・文字・文法などの基礎的知識・技能
- C 文章の読み・書きの技能
まとまった内容を聞く・話す技能
- D 教科等の学習に必要な思考を支える日本語
- E 社会的活動に参加するための日本語

(3) 学校における日本語指導の指導計画

(コースデザインのモデル)

複数の日本語プログラムの組み合わせで



日本語のコース設計例 3例

- 1 アンさんの指導計画
(日本生まれ・小1・家庭内はスペイン語)
- 2 ロイさんの指導計画
(来日3年目・小5・家庭内はネパール語)
- 3 テンテンさんの指導計画
(来日1年目の中学2年生・家庭内は中国語)

毎日映画社 (2021) 文部科学省委託

「日本語指導が必要な児童生徒等の教育支援基盤整備事業 (動画コンテンツ開発)」
研修用 動画コンテンツ 3 日本語指導の方法 1

https://www.mext.go.jp/content/20210412-mxt_kyokoku-000014129_03.pdf

目標(日本語教育の課題)・日本語能力・プログラム

目標	文化適応・コミュニケーション	学習参加(認知面の発達・学力)	
	アイデンティティ・自己実現(キャリア形成)		
言語能力※	①会話の流暢度	②弁別的言語能	③教科学習・言語能力
	<p>言語の知識・技能だけでなく、それを基盤として、「課題・問題を捉え・解決する力」として、ことばの力を育むことが重要。 それには、「文脈(コンテキスト)」と「課題(タスク)」の設定が要諦</p>		
プログラム	トピック日本語(生活日本語)		
	技能・タスク型日本語		
	日本語と教科の統合学習 (「JSLカリキュラム」)		
	母語・母文化、キャリア教育		

※ カミンズのモデル「会話の流暢度・弁別的言語能力・教科学習言語能力」
 「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)」における言語能力モデル

3 現場の実際は？

文部科学省

外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議第2回会議（2025年4月25日）資料7

発表資料 齋藤ひろみ「指導内容の深化・充実に向けて」

https://www.mext.go.jp/content/20250425-mxt_kyokoku-000041756_007.pdf

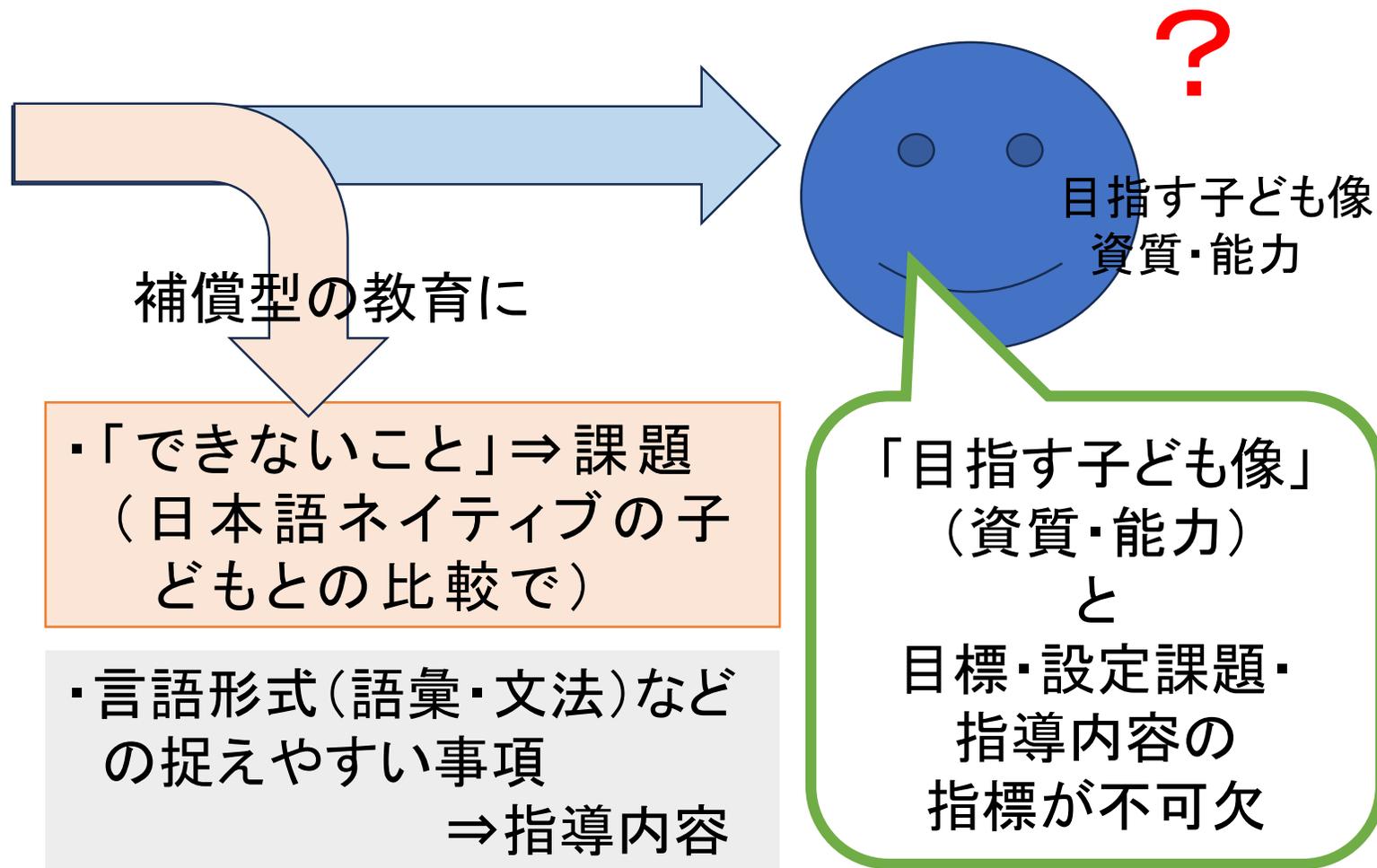
「目指す子ども像」、目標、教育内容の指標がない 全てを担当者が判断・決定

⇒ 総合的なことばの教育としてのデザインは困難

実態の把握

- ・ 家族の状況・家庭環境
- ・ 母文化(文化的多様性)
- ・ 学習・生活経験
- ・ 非認知能力
- ・ 言語の力
 - 母語
 - 日本語
 - その他の言語
- ・ 学力・認知面の力

DLA、「ものさし」で



補償型の教育に

- ・ 「できないこと」⇒ 課題
(日本語ネイティブの子
どもとの比較で)

- ・ 言語形式(語彙・文法)など
の捉えやすい事項
⇒ 指導内容

目指す子ども像
資質・能力

「目指す子ども像」
(資質・能力)
と

目標・設定課題・
指導内容の
指標が不可欠

外国人児童生徒等の教育・支援体制

初期
集中
指導

取り出しの日本語指導
(週1~5回/1~10時間)
来日後2年程度

在籍学級での学習
(入り込み指導がある場合も)

集住地域の一部では、初期集中指導が行われている。

- ・在籍学級では、サブマージョン状態
- ・おしゃべりができる頃に指導は終了

取り出し指導の実施体制

(市区町村・学校によるが、おおよそ次の3タイプのいずれか)



多様な教育・支援状況に応じて、担当者が日本語教育を設計するには、**やはり** 目標・設定課題・指導内容の指標が必要

教育環境の違い
指導の場・状況、
頻度・時間、担当
教員の専門性

文部科学省(2019)『外国人児童生徒の受入の手引き(改訂版)』より

学びの分節化・分断

① 出身国/地域から日本への移動

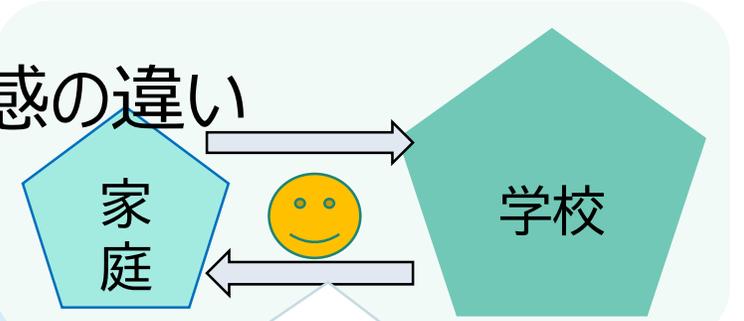
出身国/地域での
母語・母文化の経験・学び

日本での
新しい言語・文化・システムでの経験・学び

文化間移動による学びの分断の恐れ。
それまでの経験や学びが活かされない

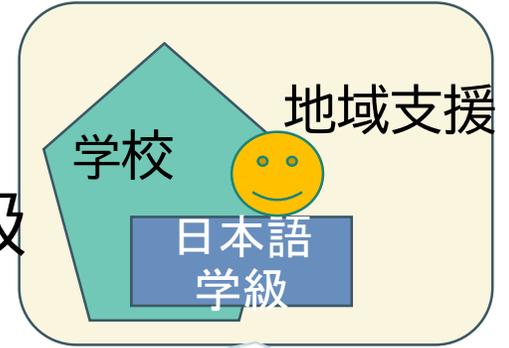
② 家庭と学校

文化・価値感の違い



家庭と学校での経験・
学びが結ばれない

③ 日本語学級と在籍学級 /地域支援と学校



日本語学級・地域支援・そして学校全
体の教育が結ばれない

④ 子どもの成長発達

幼・小・中・高（校種間）の違い

幼児期

学童期

青年期

成人期

家庭・保育園
幼稚園

小学校

中学校

高等学校

高等教育機関・職場

その子どもの成長に適した学習環境が提供されているのか？
学校種による制度・仕組みの違いによる学びの分断の恐れ

学びの 連続性の 保障のために

「日本語指導」
の計画・実施の
要点

「日本語指導」
のみでは不十分。
学校の全教育活動
を通じて実現

- (1) 経験・潜在的な力を把握し
その力が活きる学習をデザインする
 - ・母語・母文化(文化的多様性)
 - ・学習経験・学力
(知識・技能、思考力・判断力)
 - ・非認知能力に着目して
目標達成に向けて 例) 目標への情熱
他者との協働 例) 社交性、思いやり
感情のコントロール 例) 自信、楽観性
- (2) 移動後の学びをプロセスとして描き
各段階で求められる力を育む
⇒ 育むべき資質・能力とは？
- (3) 発達・成長を長期的に捉え、年齢に応じた
社会との相互作用の機会を提供する
⇒ ライフコース・キャリア形成

4 そこで、 本事業で提案するプログラム

(1) 適応性とバランスを重視したプログラム

- ☑ 目指す子ども像／生徒像の設定とそこに向かうためのプログラム提案
- ☑ 1回の授業を 複数のプログラム/あるいは活動ユニットを組み合わせて設計できる
- ☑ 各プログラムと目指す姿(ゴール)との関係がわかるように
- ☑ 各プログラムで取り扱う学習事項を明示して(リスト化)
- ☑ 具体的な活動案を提示・対象生徒、実施条件に応じた調整案と共に

適応性

- ・変化に応じて改訂し続けられる仕組み
- ・非公式な学びの場での実行できる可能性
- ・生徒の関心、目標に合わせて調整可能
- ★生徒自身が選びコントロールできる

バランスの取れた包括的な内容構成

- ・知識、スキル、人間性、メタ学習
- ・特定領域の専門性と領域をまたぐ知識
- ・成果と過程
- ・個人の目標と社会の目標
- ・グローバルな視点とローカルな視点

(2) 教育者・支援者の計画・実施を サポートするために必要なリソース

- ① 実態を把握するためのツール → DLA / ことばの力のものさし
- ② 目標の設定 → 目指す子ども像 / 生徒像
★ 各活動・ユニット案では、これに基づき学習課題と目標を設定
- ③ 教育 / 学習内容の決定のために → 選択できる学習項目群
・教育 / 学習内容項目一覧 (指標)
- ④ コースの設計のために
・パッケージ化したプログラム例 (対象による / 実施条件による)
授業実践例群 (一覧) から選択した項目を組み合わせ・配置して
- ④ 日本語の学習活動の構成・授業デザイン
プログラム別 学習活動・ユニット案
実践例

(3) 目指す子ども／生徒像 (ゴールのとする目標の設定)

検討が必要な点 総合的にことば・日本語の教育を推進するために

- ・最終的にどのような資質・能力を育むのか。
- ・学びのプロセスの各段階でどの資質・能力を前景化させて教育するのか。
- ・そのための日本語(ことば)の教育として、何をどのように教えるのか。

移動年齢により、学びのプロセスも、求められる資質・能力も異なる。
来日後の各段階で、重要となる資質・能力も変化する。

10歳で来日した子どもの 目指す資質・能力の例 ※

目指す子どもの姿／資質・能力

来日直後	来日半年	来日1年	来日3年	それ以降
基盤となる力 心身の健康 他者との関わり方 道徳・倫理 リスク管理・適応力		基盤となる力 リテラシー レジリエンス 他者と協働すること 問題解決力		基盤となる力 リテラシー 創造性 認知的柔軟性 批判的思考力

<例えば>

社会的存在として将来を描き、
学習参加・社会参加しながら
(社会に働きかけ)
自己を実現するために、
自律的に学び続ける力

※OECD Education2030で示された資質・能力「変革をもたらすコンピテンシー」を参考に

白井俊 (2020) 『OECD Education2030 プロジェクトが描く 教育の未来』 ミネルヴァ書房参照のこと

コンピテンシーの議論

「教育の設定目標やそれをどれぐらい達成できるかについて深く議論するための基盤となる枠組みを作る」(P.51)

C.フィデル他(2016/2015)『21世紀の学習者と教育の4つの次元』北大路書房 より

目標 ⇒ **スタンダード** (何を学ぶべきか)
⇒ 評価 ⇒ カリキュラム ⇒ 専門性開発
(学校・実践者の学習指導計画)

p.52

本プログラムでは

目標：目指す子ども像／生徒像...資質・能力に着目して

スタンダード：プログラムとして提案

5 2025年度
日本語プログラム事業
開発・成果

(1) ① 小中学校における日本語教育で 目指す子ども像

言語的文化的多様性を力に、学校や地域社会において新たに出会う多様な人々と協働し、探究活動に主体的に参加するとともに、ことばを働かせて思考・判断し、表現することができ、自身の未来を切り開くために自律的に学び続けられる児童・生徒を育成することを目指します。

そのために、日本語教育としては、次の3つを教育課題として設定して実施する。

- ・学校・社会生活においてコミュニケーションを行う力を育む
- ・教科等の学習に参加することばの力を育む
- ・アイデンティティや自己実現を支えることばの力を育む

目標達成のために育む資質・能力(知識・技能、思考・判断・表現力、学びに向かう力・人間性)については、今後検討を重ねて設定する予定である。

(2)①高等学校における日本語教育で 目指す生徒像(高等学校)

高校生の場合、卒業後、日本社会で自己をどのように実現していくのかという問いが突き付けられます。「日本語指導」は、単なる日本語の知識・技能の獲得のための教育ではなく、かれらがその多様性とそれまでに培ってきた力や経験を発揮しながら社会に参画し、キャリアを切り拓いていくための「ことばの教育」として実施していくことが求められます。そこで、本「プログラム案」では、多様な言語的文化的背景をもつ高校生を対象とする日本語教育において目指す生徒像として次の3点を設定して実施することを提案します。

- (1) 多様性を強みに、他者と協働して、地域・社会の共生を推進する生徒
- (2) 主体的に探究活動に取り組み新たな価値を創造し、自律的に学び続ける生徒
- (3) 社会的存在として自己の目標をもち、粘り強くキャリアを切り拓く生徒

(2)②高等学校における日本語教育で育みたい資質・能力

「目指す生徒像」に基づき、言語によるコミュニケーションを介して日本の学校・社会生活への適応のための言語の力、教科等の学習活動に参加し問題を解決するための言語の力、そして、アイデンティティの形成や自己実現のための言語の力を発達させるために、日本語指導を通じて次の資質・能力を育成することを目指します。

- (1) 日本語の音声や文字，語彙，表現，文構造，言語の働きなどについて理解し、これらの知識を日常のコミュニケーション場面で、社会や他者との関わり、行動目的、場面・状況に応じて運用するための基礎的な技能を身に付ける。(知識・技能)
- (2) 教科等の学習や自身のキャリア形成において、自身の経験や母語の力を活用しつつ、日本語で問題解決に取り組み、探究を通じて得られた創発や・創造したことを日本語で表現することができる。(思考・判断・表現力)
- (3) 日本語の学習を通じて、日本社会や日本の文化について理解するとともに、物の捉え方や視点に応じて言語や表現方法を選択するなどして多様性を活かしてコミュニケーションを行い、新たに育んだ関係や学んだことを、自身の人生や多文化共生社会の構築に活かそうとする。(学びに向かう力・人間性)

(3) 日本語プログラムの構造 小中学校

種類: ①トピック型 ②技能・タスク型(2025年度) ③統合学習(2026年度)

プログラム
学習項目と
活動・ユニット案

トピック型	トピック 場面	活動・ ユニット案
	コア 日本語	
技能・タスク型	技能・タスク	活動・ ユニット案
	コア 日本語	

プログラムを利用したコース設計のイメージ

	1年目			2年目		
	1(12週)	2(13週)	3(10週)	1(12週)	2(13週)	3(10週)
目標 (テーマ)	わたし	なかま	しゃかい	これまで	現在	これから
トピックプログラム	①こんにちは ②好きな遊び 等			来日直後 → 学校生活 → 社会生活 → 将来		
技能・タスクプログラム	①名前を書く・読む ②私の国の食べ物を紹介する 等			語り → 報告/紹介 → 説明 → 意見/考え		
統合学習プログラム	①1桁の加減法等			既習内容 → 学年の内容(探究・創造)		
コア日本語 (基礎)	言語形式・言語機能			日本語に関する知識・技能		

選択・配列・アレンジ

目標達成

関連

コア日本語はプログラムではない。他プログラムの学習活動で一体的に学ぶ

(3) 日本語プログラムの構造 小中学校 学習項目群：一覧(一部)

トピック型		技能・タスク型	
トピック	コア日本語	技能・タスク	コア日本語
好きなもの	私は～が大好きです。 好きじゃないです。	書く：願い事を書く (七夕)	～しますように (語り、因果)
保健室	きもちがわるいです。 保健室に行く？(行きますか。)	学習計画を立てる (例：定期テストの学習計画)	～したいです ～するつもりです (説明、順序／因果)
明日の持ち物	～が要ります。 ～を持って来てください。	保健室便りを読む (健康に関する情報を得る)	～ために～／～ように～ (説明 因果／抽象)
避難訓練	おさない(ください)／ かけない／しゃべらない／も どらない 机の下に隠れる	インタビュー記事を読み、 意見文を書く	～そうです。～とのこと。 (語り、因果、評価)

(4) 日本語プログラムの構造 高等学校

滞日1~3年目の生徒

4タイプのプログラムを既に開発
学習項目一覧 『ガイドライン』

- A 生活のための日本語
- B 基礎日本語
- C 技能別日本語
- D 日本語プロジェクト

卒業までの日本語の
授業のイメージを提示
生徒の滞日期間等に
応じたプログラムの配置、

学習参加のための日本語の力として日本語の各技能の発達と、その力を実際の問題解決などで運用する力を育むイメージです。
日本語の基礎的な力が不十分であれば、プログラムBを手厚くする必要があります。

	1年	2年	3年	4年
プログラムA「生活のための日本語」				
プログラムB「日本語基礎」	→			
プログラムC「技能別日本語」	→			
プログラムD「日本語プロジェクト」	→			

来日直後の生徒

2025年度：プログラムA・Cの
活動・ユニット案の作成

滞日4年以上の生徒

滞日期间が短く、日本語学習経験がほとんどない生徒
学年相応の母語の力や思考力などがあり、言語を分析的に捉えることや、自分で学習する力があることを想定しています。

学習に参加するための日本語の技能を改めて強化し、社会において自己実現するために必要な問題解決のための日本語の力を高めることを継続的に実施するイメージです。

	1年	2年	3年	4年
プログラムA「生活のための日本語」	→			
プログラムB「日本語基礎」	→			
プログラムC「技能別日本語」	→	→		
プログラムD「日本語プロジェクト」		→		

	1年	2年	3年	4年
プログラムA「生活のための日本語」				
プログラムB「日本語基礎」	→			
プログラムC「技能別日本語」	→			
プログラムD「日本語プロジェクト」	→			